

風光る5月を迎えています。母の日礼拝を共に捧げられる恵みに感謝します。
世界中の母たちが、尊敬され、重んじられる世界でありますように。

アンナ・ジャービスの祈り

1908年米国ウェスト・ヴァージニア州で、アンナ・ジャービスというクリスチャンが、母アン・ジャービスを追悼して、白いカーネーションをたくさん飾り記念会をしました。列席した方々に大きな感動を呼び、やがてアメリカ全土に広がりました。1914年ウィルソン大統領が5月第二日曜日を「母の日」と制定。日本には、教会や幼稚園を通じてこの習慣が入り、次第に一般的になって行きました。

お母さんのアン女史は、熱心な活動家でもあり、南北戦争で傷ついた母親同士の和解のための働きなどもした人物でした。教会学校では、「父と母を敬いなさい」という聖書の教えを、自分の子どもであるアンナがいる前で語っていたということです。

今年の世界幸福度ランキングでは、これだけの経済成長を遂げた国であるにもかかわらず、日本は昨年から4ランク下がって55位だったそうです。様々な要因はあるでしょうが、いつの間にか、他者への寛容さを失い、ストレスの多い社会になっていることが指摘されています。何よりも、家族や地域とのつながりが、幸せであると感じられることが、大切だと気づかれます。

母の日は、亡き母を思い、その尊敬を表す一人の女性の祈りから始まりました。

アンナの姿から、私たちは何をなすべきだと示されるでしょうか。

母を尊敬する

「お母さんありがとう」「大好きだよ」と感謝や愛情を伝えよう、と呼びかけられます。もちろん、その通りなのですが、今朝は聖書を通して、もう少し丁寧に、尊敬する、ということを中心に留めましょう。ヘブライ語「カーベード」は、「栄光」や「重んじる」とも通じる言葉で、それが「敬え」という命令形になっています。その言葉の響きには、甘えさせてくれる感じや、馴れ馴れしさはありません。

実はアンナは、あまりに商業的に流れた「母の日」の撲滅運動に後世を費やしたそうです。それは、唯一無二の母への尊敬を、社会が軽々しく扱っているように見えたアンナの反発ではなかったかと思います。先日参加したセミナーの講師が「自分の子どもに、母を敬いなさいと教えています。なぜなら、彼らは良き親とならなければならないからです。アジアの母は、子どもに与えすぎです。子どもが親に与えなければなりません。本当に自由に生きる力を得るためには、逞しくなる力が必要だからです。」と、柔和に、でもはっきりと語られ、とてもインパクトがありました。

母の日に、改めて思うことは、母を尊敬しなさい、ということです。ねだれる存在ではなく、尊い存在として、重んじることです。本当の幸せは、その先にあるからです。